俳諧七部集　上

へ 5
4118
1

十三年一月廿日 寄
佐藤忠三郎
佐藤

門 へ 和5
號 4118
冊 1—2

さるハ日よの人へ語りて風よ子周さのむかしの
あるはしる園へ諸々ん人へまさる御代てあるかりけり
せりよくちらされがんぜみたりつされちられぬん
ともの紙屋ふれ屋く世ぶりて綴てるゑ川のふしく
おしるく はんじ紙数つる人の枕るまゆのしけうくにとよの
ふかしそのまゝにくさんふれいかえやうく男よもん
きさかめ数をかく辞ん冊子と成て以ちそふきさ
雲ふ綿乃中さちゆ残んとんるのまりしきをさて
そしめふきつし戯ひてんやうといつまの紙魚ちふ
虫乃すくせありてふるかりて徒としるとも以津さ
さらいしのにふのきられ以よれもりひとしせんぶよる

の篇紙さんるれまへされるみろりよとどるそくん
書かくこうら絵図てるおもふりきあるきめ丸を
ひさすしれいふ乃さす原いおもきくれ井りく
揚生めんを帝聞つんむろし蕭翁そ五経紙
まくの加しらよ筆てるおとしの釜よ納あい生よ周
八十郎と経つくらの以うよふきたるて遠の小篠よせん
よん七綛之滑稽の七経よも以ちん乃唐倭るの
さつひかゑるし此ともとらん風しうるへしきかく
桜木よちりそあるく風月然さえをたちけうるる

皷腹水 母 散人 虚竹の川やれ留んれ
志るすん

宗孫相田小谿圖書

春の日

曙見んと人々の戸さしもさゝて斎田めくるふゆさんぬ
後しく舟さしかゝりしくなりゆくに吾松のうら見んとて
いそのかみなるり重五か枝折ありける竹墻のもとにたどりて
まちよりもはまの舟しもとの渚ひ出あひける

二月十八日

春めくや人さまざまの伊勢まゐり　荷兮
桜ちる中馬ながく連　重五
山かすむ月一時に舘立て　雨桐
鎧ならべて物あつる雨　李風
志ら風まよく中六酔なく　昌圭

ウ
くゞりより汁の出るをくゞるく　執筆
須磨寺に汗の帷子脱かへむ　重五
をのしるゝきく箪を式く　荷兮
文王のまなしもまのとを書はりて　李風
西の幸有角の竹なりくさ草　雨桐
執こゝ一夜八雲をおくし母小　荷兮
傾城乳をとりくもと最に　昌圭
勇もしふ繞よ人の影も鶴て　雨桐
わやくとのくし神楽のく里　重五
ゑ舟なりまれ臭の村行く　昌圭
荒よもよ男の乗鳶おくるに　李風
柳よ紀張ぞもてらふ鞠なりや　重五

入かゝる日も程いそくなり　荷兮
さ川のしまふたに家を連行く　李風
うつや懐かし襌きてみれ　雨桐
黒髪をたちぬる程に切捨し　荷兮
いとまうしてき五位乃升立　昌圭
松乃木に宮司乃門はさしこめて　雨桐
ともし汁もつめし時雨で　重五
能朗豆腐を七島にそ捨ける　昌圭
念仏さへおぼえん秋あはれ也　李風
穂蓼生ふ蔵を住居に替て　重五
ふくろを楊乃声にまく月　荷兮
傘乃内をゝちたる雨の音に　李風

能登おくに出家つゝく　雨桐
ありしぎん歩行なしまゝん　荷兮
酒瓶ひとつを二人してかつき　昌圭
世にあはぬ局涙に年よりて　雨桐
紀念にとりし嵯峨乃菅畑　重五
いく春を花と作りはいそかしく　昌圭
身も兄も高くなりゆく　李風

三月六日野水亭にて

奈良坂や畑うつ山の八重さくら　旦藁
折しらふるもむかしの鐘　野水
春の桃若伏あるる人待見えて　荷兮

口きくへな語そならぬく　越人
松風にたをれぬ程の酒の酔　羽笠
夢のうしろに鹿をそふ月　執筆
ウ
笠白き太秦祭過にけり　野水
菊ある垣によれ子つきそく　且藁
表町ゆかりの二人髪剃ん　越人
暁いかにも車ゆくをとし　荷兮
鱈負ふてく大津の浜に入にけり　且藁
何やらむ人家中乃聲　越人
旅衣あたゝかなりと放やりて　羽笠
萩ふしたをれ五日のまうで　野水
里人に薦を施せ妹乃家　越人

月たゝき浪に重石をく楊　羽笠
去ゝ程猿は花の鮎くらん　野水
汎こきる春の温泉の山　且藁
二
のこりしや籠堂乃殺伐多武峰　越人
内侍のえらぬ代〻眉乃図　荷兮
物おもふ軍の中は八陣にて　羽笠
名もかゝる栗しぶしやの上ナ　野水
大年を念仏ぶる恵氣次棚　且藁
こぼれしも無きむまよ見たる陰や　越人
新たのゝ家乃前ゝ狗杞くさ　荷兮
生木まな廿日ふやへ表の数　羽笠
一秋の籾宿を馬ぞ寺るれや　野水

こゝ魏まゝるさにりしきの月　且藁
陽炎乃りゝのちゑちまゝ婦え　越人
まち西行は佐寄りゝしく　荷兮
ウ 田とおくむらの里ゝ出るり　羽笠
力乃筋をえらばし中乃子　野水
廿二 漣や三井の寺るれ縁をりに　且藁
そるひく乃しぞ香の山く　越人
兄つまくりホ九日乃月さむき　荷兮
君の花とあそぶあゝるみ　羽笠

三月十六日且藁か田家にとゞまりて
蛙のしきこゝ中しきさ森是小　野水

類よあつまれ春の雨くらり　且藁
蔵京なる岩木乃奥お宿りて　越人
まりく人とらぬ馬乃子　荷兮
立て乃なを渡しの舟乃月影に　冬文
芦の穂を摂る傘の端　桃家
ウ 磯ずさりに施餓鬼の僧の集りて　且藁
君のあひより芸をならる里　聖水
雨乃日も瓶焼やらん煙たつ　荷兮
ひだるきさまも旅乃一はに　越人
弱よわく坊主ハ経きん結ひて　野水
解てやをかり梅むもなれ　冬文
今まで夏をしてやるね

同十九日荷兮室にて

咲くきの菊にも折しき白露を　越人
秋乃和名にかゝる順　且藁
袖一ノのあまみこゝろに火を消ぬ　冬文
別の月になみださへある旅　荷兮
絵ぞ花に乃宮よりは唐輪にて　且藁
春ゆく道の笠もむつかし　野水
永き日やと鞍を汲るに寄りし　荷兮
貧乃子菜生する五月雨の中　越人
紹鴎が瓢はありて蓋なく　野水
連哥のもよしれありと心のそがし　冬文
瓶壺に業押まぜて言ひ兄ん　越人

二

岩苔とりの篭にさげもちし　且藁
むさかりに衣きてありく世の中に　冬文
筵二枚もひろきこの庵　越人
朝毎乃露あはれさに麦侘ル　且藁
寒うちを送る家もなくの月　野水
風のたゆさき秋の日舟に網入よ　荷兮
鳥羽乃湊れ柳くの紫めに　冬文
おもしれさてね紙衣もつくる宿　野水
待しく一節筆の名を乞し　荷兮
家来乃ゝ手の段に奥記て　越人
縁を絵がくいふよ君が代　且藁
山を花宗のまつれは廿日よ　冬文

果しなくてつゞく雲雀明かり　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹乃あ香さ池のくまれに　越人

謀ふみたるに抄るおちか岩くし　舟泉

きれしなやや絲晒くさき雪あめて　聴雪

行幸乃しるしみに残るみ玉笠　鑫鋂

銅日まで鶯のわけ鍛治のいそがしく　荷兮

月たかき宮乃門ゆやくあるを　執筆

春

目出度乃松にふきぬ御代のまま　利重

元日の木めろの競馬見ゆかし　重五

初春乃遠里牛れかな朝日ふ　昌圭

乃さのまま海をかくしあつまれる　両椚

門さ松若葉園の雪さかし　舟泉

鯉の青水不乃闇く梅白し　羽笠

舟くし乃小松ふ雪れみかり　且藁

曙乃人影牡丹家よりさかり　杜国

睡てし次元日里乃騰りつれ　犀夕

星そうしく　かきとをぬ先れ色乃色　香庭

乃やそても小松負ふ人牛乃髪　駐雪

朝日二分柳の動く匂ひこれ　荷兮

元ゆくみる乃来ひくき家ふ　日

芹摘もてこけく海たき蜘うな　且藁

のりもの〻人乃行くれとて

みゝふさぎ白髪いやしく冬まとて　越人

古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉

傘張乃睡り胡蝶のやどり哉　重五

山や花墻根〻の酒のあし　亀翁

花にうつれて蓑より垂る花の露　越人

春野吟

足跡に桜を曲る庵二つ　杜国

藤寺からぬりみまさくらかな　李風

枝まげて桜乃還をきかあれ　荷兮

餞別

蓑の花もしらかしにて別れ　越人

山畑乃茶つみとられ夕日かな　重五

姥ひとり住捨る花の夜かな　円

夏

かしはもぎれを乃山鳥尾八振し　九白

郭公さゆのし焼くめの花かな　李風

あつさの枝屋乃背戸の一里塚　越人

うきしさを茶かられ梅のつ川かな　杜国

ふね竹のうしかくたる雀かな　亀翁

傘をさしかけて堂をゆくかな　舟泉

武蔵野をとひとる蝸

ともかもや声く中く京の衣川　高露

逢坂乃秋八丈ニ声にゆく

みじかよやおくれかゝりの夜の月　睡雪

老聃曰知足之足常足

夕からに雑炊あつき菜屋かな　越人

篇末の微雨こぼれて時鼓かな　柳西

はしきみハなかむる井にあまり　塵交

萱草ハ咲かぬ黒き花乃色　荷兮

蓮池のふかさわするゝ浮葉かな　仝

暁乃夜隠菜屋に遅きか雁　昌圭

夏川乃青すゞしさ水草哉　童五

譬喩品ノ三界無安猶如火宅

といふ心を

六月乃汗ぬぐひ居る臺かな　越人

秋

脊戸の畑なすび黄ばみてきり〴〵す　旦藁

貧家の玉祭

玉祭柱にむかふ夕かな　越人

大きくもまさに一疋入る秋に　西相

それわしく人をやとへる月見かな　芭蕉

山寺のすゝきかくとの月夜かな　越人

見ふく家も面白き秋の月　妙石

八幡をかする岸風の絹きて

呉竹さし節のうち見ゆ月の舟　仝

待恋

こぬ人をとゞまるしるし見棹さん　荷兮

閑居増戚

秋ひとり琴柱はつれて寝ぬ夜かな　荷兮

我良たちとゝ名一里人は如かな　舟泉

冬

ゐるきぬ出羊八夕日の村しくれ　杜国

芭蕉翁を宿し侍りて

やすやすと旅寝する蚊屋を見さけり　大垣住 如行

云名めくら蕣の子乃萬かれ　昌碧

するをきくたくむ宿のあるしかな　芭蕉

り魂の櫻井てちるさくらかれ　越人

芭蕉翁をおくりて久しかり

この比は如何にと名残かな　杜国

隠士にかりなる室をもうけて

あさましき桑袋ひとつ川ぞむの庵　荷兮

冬乃日

笠は長途の雨にほころひ帋衣はとまり〳〵のあらしにもめたり侘つくしたるわひ人我さへあはれにおほえける昔狂哥の才士此國にたとりし事を不図おもひ出て申侍る

狂句こからし乃身は竹斎に似たる哉　芭蕉

たそやとはしるかさの山茶花　野水

有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮

かしらの露をふるふあかむま　重五

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国

日のちり〳〵に野に米を苅　正平

わかいほは鷺にやとかすあたりにて　野水

髪はやすまをしのふ身のほと　芭蕉

いつはりのつらしと乳をしほりすて　重五

きえぬそとはにすこ〳〵となく　荷兮

影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉

あるしはひんにたえし虚家　杜国

田中なるこまんか柳落るころ　荷兮

霧にふね引人はちんはか　野水

たそかれを横にながむる月ほそし　杜国

となりさかしき町に下り居る　重五

二の尼に近衛の花のさかりきく　野水

蝶はむくらにとはかり鼻かむ　芭蕉

のり物に簾透顔おほろなる　重五

いまそ恨の矢をはなつ声　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜国
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水
しらじらと砕けしは人の骨か何　杜国
烏賊はゑびすの国のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけじ郭公　野水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
箕に鮗の魚をいたゞき　杜国
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
けふはいもとのまゆかきにゆき　野水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜国
廊下は藤のかげつたふ也　重五

なかくも杜年

はつ雪のことしも袴きてかへる　埜水
霜にまだ見る蕣乃食　杜国
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮

麻呂か月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞徳の富　正平
雨こゆる浅香の田螺ほりうへて　杜国
奥のきさらぎを只かへりにあく　野水
泰ふかうて流されたる男　荷兮
縁さまたげの恨のこりし　羽笠
口おしと瘤をちぎるちからなき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遅かれ牡丹ぬす人　杜国
縄あみのかゞりはやぶれ壁落て　重五
こつこつとのみ地蔵切町　荷兮

神それの字となり嫁入のいのしく　杜国
うぶ湯いくしれもたのむ日のき　野水
糀そこに餅をゆるすや雨のくずる　羽笠
そこひさを絶えぬ娘の婦となりて　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
三線からん不破のせき人　重五
道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉
ねざめねざめのさても七十　杜国
奉加めす御堂に金うちかひ　重五
ひとつの傘の下挙りさし　荷兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕まぐれ　杜国
まどひくつるる猫をとゞめさ　野水

月にたてる唐輪の髪の赤枯て　荷兮
恋せぬきぬた臨済をまつ　羽笠
秋蝉の虚に聲きくしづかさは　野水
藤の實つたふ雫ほつちり　重五
袂より硯をひらき山かげに　芭蕉
ひとりは典侍の局か内侍か　杜國
三ケ月の鸚鵡尾ながうなるいくさ　重五
しら〳〵とろいさむ錢の猫活薊　荷兮

つえをひく事僅に十歩　杜國
つゝみかねて月とり落す霽かな
こほりふみ行水のいなづま　重五

歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけのはる　芭蕉
馬糞掻あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平
らうたげに物よむ娘かしづきて　羽笠
燈籠ふたつになさけくらぶる　杜國
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉
蕎麦さへ青し滋賀楽の坊　野水
朝月夜双六うちの旅ねして　杜國
紅花買みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五

まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
仏喰たる魚解きけり　芭蕉
縣ふるはな見次郎と仰がれて　重五
五形菫の畠六反　杜国
うれしげに囀る雲雀ちりちりと　芭蕉
真昼の馬のねぶたがほ也　羽笠
おかざきや矢矧の橋のながきかな　杜国
庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮
捨し子は柴苅長にのびつらん　野水
晦日をさむく刀売る年　重五
雪の狂呉の国の笠めずらしき　荷兮
襟に高雄が片袖をとく　はせを

あだ人と樗を梢に呑もさん　重五
芥子のひとへに鳥とる禅　杜国
三ヶ月の東は暗く鐘の声　芭蕉
秋湖かすかに琴かへす者　羽笠
烹る事をゆるしてはぜを放ちける　杜国
声よき念仏藪をへだつる　荷兮
かげうすき行燈けしに起侘て　野水
おもひかねつも夜ルの帯引　重五
こがれ飛たましゐ花のかげに入　荷兮
その望の日を我もおなじく　はせを

なに波津にあし火焼家はすゝけれど

炭賣のをのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
賀茂川や胡麻千代祭微近江　荷兮
いはくらの聟なつかしのころ　重五
おもふこと布搗哥にわらはれて　野水
うきははたちを越る三平　杜国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火をかぬ火燵なき人を見む　芭蕉
門守の翁に紙子かりて寝る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず款冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鋳る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
なかだちそむる七夕のつま　杜国
西南に桂のはなのつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに卜木うる音　芭蕉

縫の紊り賢なる女の見えにける　重五
酒瓶に粟をあぶる日のくれ　荷兮
はやり来て撫子かざる正月に　杜国
つゞみ手向る弁慶乃宮　野水
寅乃日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かうばしき南京の地　羽笠
いがきして誰ともしらぬ人の像　荷兮
泥にこゝろの清き芹の根　重五
粥すゝるあかつき花にかしこまり　野水
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北のかたなくなく簾おしやりて　羽笠
ねられぬ夢を責る鶯　杜国

田家眺望

霜月や鸛の彳々ならびゐて　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずる牛の塩こぼれつゝ　杜国
音もなき具足に月のうすうすと　羽笠
酌とる童蘭切にいでゝ　野水
秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜国
茶に糸遊をそむる風の香　重五

雉追に烏帽子の女五三十　野水
庭に木曾作るこひの薄衣　羽笠
なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮
麻かりといふ歌の集あむ　芭蕉
江を近く独楽庵と世を捨て　重五
我月出よ身はおぼろなる　杜国
たび衣笛に落花を打払　羽笠
篭輿ゆるす木瓜の山あい　野水
骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉
乞食の蓑をもらふしののめ　荷兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜国
御幸に進む水のみくさみ　重五
ことにてる年の小角豆の花もろし　野水
萱屋まばらに炭団つく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮の実　芭蕉
しづかさに飯台のぞく月の前　重五
露をくきつね風やかなしき　杜国
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水
元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　荷兮
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜国
春のしらすの雪はきをよぶ　重五

水干を秀句の聖わかやかす　　　　羽笠
山茶花匂ふ笠のこがらし　　　　うこう

追加

いかにみよと難面うしをうつ霰　　　羽笠
稿火にあふるこのれ長の松　　　　荷兮
とくさ苅下女よ髪をちやきて　　　　重五
檜笠に宗祇の旅をしる　　　　杜国
浪の路かへる月を見る海　　　　芭蕉
ひとりは稲をきるの波草山　　　　野水

ひさご

江南の珍碩我にひさごを送らる。これハ是水を盛酒を
入るゝ器にもあらず。或ハ大樽に造りて
江湖をわたれといへるもいかにぞや。是を君子の
惠子が手にて用ゆるところをしらず。これをもて
に醉るものにあたへてはらひに醒る。醒てハ日月
陽秋をしらしめて雪月花の窓の郭公も
このまぬてうれく声を君知人とも云へるさるに来て皆
ゝハ唯此瓢の思ひを更に是ハとよれのみならず
にして乾坤の外にあそぶこゝろも出ぬものか。毎日
世間をまなびぬる人

元禄三六月

越智
越人

花見

木のもとに汁も鱠も桜かな　翁

西日のどかによき天気なり　珍碩

旅人の虱かき行春くれて　曲水

はきも習はぬ太刀の鞘　翁

月待て仮の内裏の司召　碩

籾臼つくる杣がはやわざ　水

鞍置る三歳駒に秋の来て　翁

名はさまざまに降替る雨　碩

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水

中にもせいの高き山伏　翁

いふうをも悔て一夜え落しけり　碩
かゝる節よき恙湖乃かゝ　水
物わすれ身よその道とせられ　翁
月見に哉乃紬さき露　禾
秋風の舟をこゝろる波の音　碩
原ゆくかりや白子ふる松　翁
千部読花乃盛りに一身田　碩
巡礼死ぬる宿のうそろしき　水
何よりも蝶の現をおそれける　翁
文出ふるの力なくやうき　碩
羅は日をいとえて流さち　水
継豊みうれに浮かれけり　翁
手妻さ絶れ笑ふさる顔よ　碩
酒でもみけれある夜一夜便　水
如六乃園をのぞくまて暮かゝる　翁
假此指佛すむよ念仏　碩
井りしよ土間に孫達八発落　水
家名も里のなふきその也　翁
憚れていしぬ躍乃影まき　碩
月数しふ鳴渡る月　水
花落あまりまけそう枯て　翁
唯四方描る草菴の露　碩
一貫此識むつしと申候　水
鵞着乃ゝもはゝきハ飯ぬ京　翁

花咲けり芳野あたりを欠廻り　水
虻にさゝるゝ春の山中　碩
翁十二　珎碩十二　曲水十二

珎碩
いろ〳〵の名もむつかしや春の草　翁
うたれて蝶の夢はさめぬる　路通
蝙蝠ののどかにつれとさし出て　仝
かゝる築地のくずれぬる所越ぬ　碩
紫蘇の実をこのむ夜のうちに入れ今年の葉　仝
勧学あそびて月を招くよ　通
秋の色宮ものの戸の夜露かり　仝
このきを立ちよりきくかつてしぶ　仼

うつり香の羽織を首にひきまきて　碩
小六うたひし市のかへるさ　仝
鯲汁乃ちへさく見事川の端　通
念仏まて松のひさしつこさき　仝
こし〳〵えし菜も水まで筆の書　碩
庄屋の里乃大なる松にされ　仝
狼婆稚き人乃姫隠れて　通
花見あくれよ月は猿の歌　仝
志らのさまを揚の下き日和なり　碩
生鯛あくつる浦煮春は　仝
此村の庚申講者なかり　荷兮
替る〳〵んとけそその志りをいふ　越人

かたつむる世を退居もせぬよるゐ　兮
まつく泣かせて酒乃のみきハ　人
なさの兎やる秋乃夕をまてしひらき　兮
蕎麦きゝ白ゆり山の胴中　人
うかれくる里乃まつれ廿日の親　兮
まわりしてつまかくらぬ裸かし　人
絵つりしやかの宮へと立ともと　兮
文珠の智恵も槃特の愚痴　人
打まれか減文ハおまかひし加減哉　兮
何ともをぬる落る胡桃　人
恋の小歌のれいうすみて笑なス　兮
象ふとさ龍をのみぬおしして　仝
汗の香をかくえて衣を取り結ひ　人
ちゝやらに無とちもおとてまる　仝
花さくらりて百人煮服立ま　兮
まちの旅とも打とそさる旅　仝

珠願九　翁一　路通八
荷兮十　越人八

城下

鉄炮乃遠音に曇る卯月哉　里東
砂の小麦乃痩てくらし　杜径
西風にますほの小貝拾はせて　泥土
なきぬめる一川修膳ひろひさより　乙州

碁いさかひ二人しらける有明に　怒誰
秋の旅番衆揃ふて出る旅　珎碩
女郎花心細道に折られて　筆
月の中おもはく人をかち着る　野径
ゆふべも又川原燃しをみて笑を　里東
蔵乃おくりしきまつきや　泥土
馬に百升米屋をうしなふて　乙州
一里こえて見る山乃下薪　怒誰
見苦しく寝たる屋に家搗　泥土
桜木れ花ハ泥雨しくれて　里東
雪舟に乗る難の女は寝させられ　野径
哀ならんつまく了百の銭　乙州

月花に庄屋をよひて高咄せ　珎碩
薮越乃揺なかゝる早蕨　怒誰
わらびきし身に針ても数のとすれす　里東
米の返し遂れ揺ま治あらす　珎碩
乃みぐりて茶酒の荒の一躁(サキ)　乙州
古きをくちなんのさぐる猟鬼　野径
時しらぬ百姓まても烏帽子きて　怒誰
配所を見舞ふ怙御乃蛤　泥土
名をそがすハ船遊女の涙なん　珎碩
連も力を皆庄跡なり　里東
切し風の大雪寺縄を吹隆し　野径
虫乃こもるに関所へなき　乙州

綱剛き[illegible]て　泥土
夕立の鳩に蓮食嬰虫をと　怒誰
音絃乃嗽(せき)に澄かなし哄気声　里東
四十まで老ぬる月のしき深　珠碩
鬘くせに桃乃縁を譲乗て　乙州
砕くを細きにあらて咲なし　野徑
杉村の花八ひら葉ふ又為寄つき　怒誰
田なか庁隅よ苗乃とりはし　泥土

野徑 六　里東 六　泥土 六
乙州 六　怒誰 六　珠碩 五
筆 一

雑

亀の甲京にてるし防ぎ喰ません　乙州
唯斗鸎巣に風のあくなる　珠碩
筍姫乃本郷(ウ)仕まくを弥のまて　里東
かゝ骨おぼろにゆるかゝれの縄　探志
猶寒く奥の洞ひろ紀枝の月　昌房
蟷螂落てきゆる虵　正秀
秋荻の声まちくの紀踏る気　及肩
風呂沈加減乃声ての数より　牧徒
常乃宅さき夢にく鳴出し　二郎
旁のやうなるかほすての壁　乙州
初花に雛の色稽形なく　珠巩

んのそこにうゑそあまかる　里東

浅茅原乃露に吹そこ乗り笹の露　探志

蘇てられ起て牛ハ角啼　昌房

跡入の中を見ゝく月かり　正秀

すゝき上京を見渡るやさしき　及肩

藍に染る飛鳥の町屋せかり棒茶　野径

雀を放よ籠乃ちぢく鳥きさ　二嘯

うき世暮る日をこんみちよ我身まで　乙州

跡ゆひなつかし西方の空の雲　珍碩

流くらき本鄕給の縁すくも　里東

撰ゆすされくらきくあけ方の　探志

暗かるまに葉〓乃下をたつる紺　昌房

信ふるを啼るふもとわり口　正秀

いまきゝる往一筋に被若　及肩

酒汲かゝる鯉棚乃秋　野径

けふしと切籠の影も風吹て　二嘯

まかの寿子もかの如月　乙州

啼籠子味のつくる蛇々退　珍碩

燥掃うちハ次よ居始むる　里東

目をぬすれ丸のうそれともあわせ　探志

さらひるさかしさられ上侍　昌房

手まくろ手紙縁ちて縫れさり　正秀

縄を集る李出上莚　及肩

花乃比豆の日待にまれごえて　野径

さゝらに杉に獅子のはる風　二句

乙州　四　　珎碩　仝　　里東　巳
探志　仝　　昌房　仝　　正秀　仝
及肩　仝　　野径　仝　　二嘯　仝

田野

暁道や苗代時乃角大師　正秀
めきもえまむ砂風の靴　珎凡
篇ふるのやまれ鳴しまるの花　仝
かゝる杉のしき門口の文字　秀
月影に利休乃ちゃを鼻に嗅　仝
渡しゝ中ともしそうしなり　碩
虫喰とかついてねしとしそうくむ　秀
竹にしの木履ころめる　碩
野菜文を百もよみてたるゝ絵に　秀
なまゝゝくくゝり候の侍　碩
須ゝ六まき狗子目出たる弘前に　秀
抓の出る弓かまへなる　碩
月氷る師走の空の銀河　秀
ち寒に飛ひる猪も進まれ　凡
りしめて大脇指も売られて　秀
粗あるゝ子ゝ縞縮よ殺り花　碩
江戸酒を花咲ぶにふしうの　秀
おい乃山伏はれ入逢　仝

雲雀啼里は厩糞かきおし　以
ぞをと吹る禅門の祖父　秀
本堂ハまだ荒壁のあら継　以
羅綾の袂しほりかね　秀
歯ニ痛人の姿を絵ニ書き　以
薄雪うすきもすき腹とり　秀
篠垣の窓ニ舟焼をとき　碩
口上果ぬいさまし時宜　秀
夕?の小刹の花の草稿　碩
秋入初る肥後の隈本　秀
聲白波も月見る舞台　以
まだ布子ひとつ粉あくり?　秀

沢山に兀めし喰て叱られて　以
呼あるも猫を汲すす　秀
子紙に小人町の雨あがり　以
やしろの楓木の芽萌立　秀
蔵?一疋縫挟つる苔ありて　碩
小歌くるに御不申ゆる此のきろふ　秀

正秀　十九
珎碩　十七

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常に芭蕉の軒に行かよひ瓦の窓をひらき心の泉をくみて十ゐあまり乃文字の跡風をもかけとゞあへる此集や家に待あまりて待おせる秋の二三子庵に侍りて火桶にあたり炭をおこし菴至これに只我ほとけ宗人の名を絶らすましへる葉覚ある人と志のゝ老若に嫌のさゝや名るを咲きさき楼に参りて今宵乃雲の古さよ我誠と香よりおもひいつる趣乃さゝうら耳ま入給くもてつるこのあ意る乃めともの是に堀のすりうらるゝやこれを云ひ至去の日乃ゝつと出しより秋の月まかしらかと帰けんや今宵の幕あらて意にはあへちの二十五日にいくらとあへ見とひろ

きこゆるまゝに姿乃緒をとあやとり折さむれハ又くゐめき炭の爪みちとりくしくる勁草をかく付侍るるハ詩乃正義はいへる五つ乃ものなる行る公子この花て乃友らひまハ行しれと例の花よ仰せる所であし人宗鑑より不ありつる貞徳しひし白芭蕉翁乃そ逢てやりられ手を携へて西美乃詠を絶る心此木乃集のるま小路くゐの名こそり乃秋きり大桶乃傍られより名ぬき炭乃名の身をとうちまりつる炭俵げに是ハハ誹世りうと枕ころちるを小子心をとうてまし抄り出うるしや此志うを見し婦娘と成るこのゆゑて筐ら序を出てまゝに携へていたれある由をたり今其初を搦めて勁草をのつゞりひ書りさぞよ鉄をつる境まハ

わかしのしところちと法てそむ

元禄七乃年夏閏さつき初三乃日　素龍書

むめかゝにのつと日乃出る山路かな　芭蕉

處々に雉子乃啼たつる　野坡

家普請を春のてすきにとり付て　仝

上乃たよりにあかる米乃直　芭蕉

宵乃内はらはらとせし月乃雲　仝

藪越はなすあきのさひしき　野坡

御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡

娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉

奈良かよひおなしつらなる細基手　野坡

ことしは雨乃ふらぬ六月　芭蕉

預けたるみそとりにやる向河岸　野坡

ひたといひ出す御袋乃事　芭蕉

終宵尼乃持病を押へける　野坡

こんにやくはかりのこる名月　芭蕉

はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡

露を相手に居合ひとぬき　芭蕉

町衆乃つらりと酔て花乃陰　野坡

門て押るゝ壬生乃念仏　芭蕉

東風々に糞乃いきれを吹まはし　仝

たゝく居るまゝに肱をけつらぬ　野坡

江戸乃左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方々に十夜乃内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房乃おやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印乃湯治を送る花ざかり　芭蕉
なは手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あく濱乃雑炊　芭蕉
千どり啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進の高乃はてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
屏風の陰にみゆるくはし盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂のかたまりて　野坡
外をざまくに囲ふ相撲場　嵐雪
細々と朔日ころの宵乃月　利牛
早稲も晩稲もおもん出る　野坡

ウ 泥染をながき流にさらすらん　嵐雪
あちこちされて昼寝するなり　利牛
講かゝる寂嫁を伴ふよ縁　野坡
てうしくも参るこのわり　嵐雪
思ひ合の九ちハ早壽々護法　利牛
五百のかけを二度に元より　野坡
綱ぬきれいの紐ある宮ぬく　嵐雪
人のさりしも虚思むなり　利牛
新役の鞍を下せし馬の立て　野坡
飯衆中なる芋をとる月　嵐雪
漸と両繕やミて秋の風　利牛
鰯れみてハ又餅くく　野坡

名 奉公のぬるしたる鬚に墨ぬりて　嵐雪
抱揚る子の小役をさする　利牛
くりかへし済月の前掛送る銀　野坡
心みかへし着乃せんさく　嵐雪
婿のくる娘の世帯押つかう　利牛
ことしのかれハ何も障りぬ　野坡
寺持の御まよ法をさすらん　嵐雪
けらいかの小家ならよる　利牛
黍の穂ハ鈍れし風に吹倒也　野坡
ある場の喧嘩の縁すむ月　嵐雪
者ハとうし留て人に寄る　利牛
今年宿やまくちハ序を久れ　野坡

ウ

賣手もうつてみたる文証　嵐雪
日かゝしとゆふの入り出し　利牛
隣合乃役きゝせん建らるゝ　野坡
うしろ事乃志れぬ細引　嵐雪
稍ある海をさしめく岩のけ　利牛
まさうひ残る卯月の餘　野坡

ふか川にまかりて

空豆乃花さきにけり麦の縁　孤屋
昼乃水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨ふりて　岱水
そつとのぞけハ酒乃最中　利牛

寝所に誰もねぬ宵の月　芭蕉
どさりと塀乃ころぶ秋風　孤屋
きりぎりす薪乃下より鳴出て　利牛
晩の仕事乃工夫するなり　岱水
娵をよい所からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらす啼わたり　岱水
家のながれたてし見ゆる　利牛
鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて売出ス　孤屋
この春ハ中間の新しき　利牛
よれし柳ほか今年みじかて　岱水

宮乃紅吹そうしたる朧月　孤屋

ふとん丸けてものおもひ居る　芭蕉

ぬ 不届な隣と中のわるうなり　岱水

きりもち焼をよくあぶられ　利牛

涼すみのひそかに新所しぼち守　芭蕉

星ころれするかよをと節ある　孤屋

暮のやーにまそろて油れ汗至　利牛

寄手を送りて揺る鳩芦屋　岱水

今のまゝに雲れ雪子をさしてゐる　孤屋

手貢すんさとはえてれまかり　芭蕉

息災な祖父の土産のうれしさよ　岱水

堪忍すしぬ七夕乃照り　利牛

名月のまへに合すや芋畑　芭蕉

はらりとそ落る鮎　孤屋

ウ てのころさ岩の通りもうすきく　利牛

山乃根際乃鉦かすかなり　岱水

また雪ふりよく風の吹出し　孤屋

晒乃上に白くもり鴉哉　利牛

おかりて女子えらり遅さそ　芭蕉

余乃力さそりし茎なんとし　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛

各九句

百韻

子は裸父はてゝれで早苗舟　利牛
岸のいばらの真白に咲　野坡
雨あがり珠数懸鳩の鳴出して　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に茶色乃紬たぐりよせ　野坡
こるゝ鄰わかく人あまた　孤屋
蕎乃丹干蕎乃茎汁かるくさ　利牛
掃く路のうへ檀ちるらし　野坡
ウ
ちゞめきて我中てらの思はりほあり　孤屋
坊主になれとやうり仁平次　利牛
松坂や矢川へそれて通り　野坡
ゆかし勝もつゝき関乃坂　孤屋

十二三弁乃衣裳の寺まいり　利牛
本堂はしらのまたよろしく　野坡
日乃あたる方をあかるむ竹乃色　孤屋
只奇麗にはすくなる　利牛
近所路乃もし衣詞をかへかへて　野坡
天気乃相よき三ケ月乃晩　孤屋
料理ありて重ねあまるむかひて涼　利牛
椽の笑若る座根のさらし　野坡
帯袴乃良き連立恋えかり　孤屋
作親ことらの人無をもつく　利牛
ほかしと二つる灸乃いたみ出　野坡
ほうらく沙への経まとめる　孤屋

なひ袖をふりくるしみをおもひ　利牛
兼綱の糸もきれつくし縁　毋破
にしも西国武士の若のつとひ　孤虚
尚おのれより今日も大影　利牛
切蟷の吟体しる極なれと　毋破
くらう納豆を仕処広庭　孤虚
攏目をまちこうきとも続てころ　利牛
若てきかけるあ結の童しきき　毋破
つまときあれの名を押しれある　孤虚
よそなり乃霧出ても妻き軒の右　利牛
これの存様よ貢ぎ集るも極　毋破
すみきしれおれおあるこつてん　孤虚

ひつそりとるお盃をかさる浄土寺　利牛
戸てかうくみすしき風呂も中孫　毋破
伐透氏桃と椿のすまあひて　孤虚
赤ひ小之ハあかうしき円　利牛
須よと八宿の男此名をとうえ　毋破
師走比丘尼の風乃辛なよ　孤虚
餘橋此何をさらく実をえて　利牛
天満の状をひと書かれなり　毋破
廣ゝ袖をとうしたひめる船乃右　孤虚
おく説みして系ゐる観音　利牛
然きする薪を夙をまねくて　毋破
十日又去乃ふつきへしすゝめ　孤虚

三

舟ぶにかきさげ娵の泣ゑかり　利牛
弦打颪海へしく掃　孤屋
機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡
小昼のころの空静し　利牛
堀端に勝る處を見付出して　孤屋
網の繕ひけを急でつんなふ　野坡
麦畑の替地に渡す傍示杭　利牛
賣人にもまうし新酒の手　孤屋
指傘も干ずに見えたれのさま　野坡
又此肩の古疵いたしき　利牛
峡まる藪へ上がる二十五騎　孤屋
多めきえみんとかく宿掃しかりかり　野坡
茂雲乃とまられ初しを涼出し　利牛
一つくつりよ餝乃雲鷸　孤屋
淡淵に藏渡しちきる舩乃舟　野坡
たよめすりとる看板乃掃あらひ　利牛
めを縫く安理に晴る騎の多　孤屋
又たのみして百人頭たなりきく　野坡
かくさそれ中の己此目をまつてき　利牛
入来る人に味ある直をもれ　孤屋
まちうらむに本郷路乃新田川　野坡
此菜屋乃みゆる宿乃名にほさき　利牛
ほむらしてまんとほゞ手雲ちされ　孤屋
多ノ葉よ餘まりしる熱汗　野坡

寺乃門引越て居る桜哉　利牛
丹漕ける所ゝ中よく　孤屋
おちくるかし時乃百乃春　野坡
入舟つく内乃六内　利牛
拭ちくお上の菱居ひ纔ら　孤屋
当きつの絹うりつひ　野坡
犬乃ありけれ畑乃猫のけて　利牛
何年菩提しまぬ楊乃末　孤屋
変今まで同心乃あとを継　野坡
丸九十日湿をわりらふ　利牛
投弁もゆるまたにめつさし　孤屋
足なし基盤よりり像がよ集まる　野坡

里離れ惣絵引乃あらつみく　利牛
やれうへかりのを嫁の襟りと　孤屋
奉りる朔日志までの精進者　野坡
うんち呆ける八半丼宛　利牛
丁寧に仕甚俵乃口かゞり　孤屋
術ぬる漂て土くあまにある筋　野坡
父御に鬢帯の名字をさがしり　利牛
身で居る鯰乃やきもの　孤屋
名ウ
宮参んを今年生風を欲ありで　野坡
もてや佐筆もすこし数押よく　利牛
昌膳の餅あ用をとうさこうり　孤屋
歩月ふりて之田る運坂　野坡

減もせぬ細活屋の世の底さらし　利牛

門建並ぶ町の桐活　孤屋

彼岸過つ菜乃花の咲まく　野坡

三人たくさりおりしる春　桃家

春之部　歳旦

立春

蓬莱に聞はや伊勢の初便　芭蕉

東雲や[illegible]の門[illegible]さりの松　濁子

みちのくのけふ関越ん箱の海　杉風

春や祝ふ丹波の鹿も帰るとて　京 去来

かさりなは供もつまさしを[illegible]乃春　膳所 正秀

いそかしき春を雀乃かきはかま　大坂 洒堂

餝つけや[illegible]のしわひの梅[illegible]　岱水

梅いさき門徒坊[illegible]ちよ[illegible]　沾圃

同下れも刑乃洞や年忌の口　孤屋

初日影[illegible]芸立もつまさしや　利牛

年[illegible]親の名をよみ[illegible]　野坡

梅

梅一木つれなく見えし[illegible]かな　素沾

むめ咲や臼乃挽木のよきまかり　曲翠

むめか香に[illegible]節[illegible]る[illegible]　支考

[illegible]ころをとりこく

むめちるや糸屋[illegible]北日乃白ひ　伊賀 土芳

梅咲て湯女乃崩をむかへけり　利牛

赤みそ乃にほひにくもるむめの花　游刀

みなをしく咲からけりて梅乃花　野坡

白粉を娘すゝめる妻戸乃柳　杉風

おぼろとは乃七くさくれてゆく　其角

さくらさく頃に白へる花乃垣　野坡

七くさや粧ひさしけき切刻く　仙杖

うちむれて若菜摘せし贈りかし　玄梅

雛月一夜つくもりてゑひらふ　伊賀 大宗

大きさや嫁乃出ても雛月　仙花

おもろ肉おくさまさまに雛市か

深川乃夜る

春早きや雪乃あけぼの三ヶ一　利牛

十五日まで薩月乃たい炭　孝久居

猫乃恋初よりかう鳴やうるさし　翅紅

ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶かな　其角

鶯

うぐひすにほころぶ梅の匂ひかな　嵐雪

鶯や葉をかしくんなかの丈　千角

うぐひすのあかれ聞りきくの声　桃隣

うぐひすや門をたまたま鳴て来る　野坡

鶯や一声もなきをみすかり　利牛

蔚

こねりをもつりして植し柳かな　沾圃

陰まどし月のまひろし柳かな　素龍

又人にかけられて居る柳かな　野坡

せきれいの尾ハ八つ身さる柳かな　一風

町なかへ来てうく宿の柳の手　利牛

傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

ちそこは籬よちり込椿かな　孤屋

枝長く伐らぬ花を椿かれ　湖春

念のためかうかうつ手むむ椿かな　岱水

縁にゐてきぬみせん茶つみさき　嵐雪

寄のねも流れ寄る家の椿　支考

木よ椿落ちてくろし椿数ほどり　野坡

花

京の花見よりゆかしまくく

幕寺のおよりの吉かしさの蕗あく

なくかるうさりしれ松かげをよめくて

四つごきのそろはぬ花見心かな　芭蕉

あつせや内て花見れ旅とか　杉風

うかうかと来ても寝ぬ夜の旅寝かな　文岬

何かしのかすの座そう花見て行うて

中下もそれなりの花見かな　素龍

苔むや白きよりしら実かさも　去来

湖かしの湯を汗勝や庭の花　孤屋

あさ〳〵と云出たの霜乃あしさ八　荊口

たうれても枝のこしていきる茂え八　斜嶺

柳の聲出ゆきう雲や花の中　北枝

井舟まく人まや朽えをはさのう　御春

あくまりと花よ夜報のさそうて八　其角

咲からも毛虫にならし花桜　北圭

やまさのちらや小川の水車　大津尼　智月

春縁も盤雲かつきる出ぬ人代　大坂　之道

詩出うま梅教くる遅れて　祐甫

山桜小川飛こえおなこ八　越前府　昔全

咲かうして花すまのつく摩囊坊さ　利牛

おちつきき魚やまうや桜かり　仝

おりよくる桜てふくや臺所　孤屋

おふみてあえそふ日多くて茶みへ八　野坡

舎乃舟みるあつまるや出きろう　仝

上巳

雪すれ川乃なさまて汐干かな　沾徳

盆身ふり言ふるや言の桃の花　桃隣

ふるさとの桃をいつれの雛　其角

雛乃きんに解ても捨もひな哉　このみ　如行

日半路を照られて来るや桃の花　野坡

鶏の縁毎年咲て桃の花　利牛

蔵頭やこるの色かくもの花　孤屋

青柳乃泥ましたるゝ汐干か八　芭蕉

鄙しらん

淋つひま令ある小あみ山ふ　[illegible]有

春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏　芭蕉

若緑つゝしの葉や二三本　子珊

ほそりくとてみ嬉門のつきあり　怒誰

鳥乃りやけの陽炎や風の末　猿雖

あまよりきさき鳥の麦の鬼あり　仙華

旅行

法度場をえ旅より内へ入すゞれハ　野坡

此集いまだ半なるに孤屋旅立

事ありける京川をてみまのく

雲霞とをくまきれりもおぼろげに　野坡

梅さくら咲てとまりとまり　利牛

夏之部発句

首夏

塩うをの裏ほす見え衣かへ　嵐雪

衣この人十日あやくえ春たくのり　野坡

綿をぬく旅ねはせりし衣更　孤屋

蚤よりやれきさ添やしるへ　素芝

毒のあとけきまほその歳うふ　子珊

麻風の隠家有し衣かへ　利牛

うの花

卯花やくらき柳の及ごし　芭蕉

うの花の絶間たゝかん闇の門　去来

旅行

卯の花に芦毛乃馬の夜明哉　許六

卯乃花や暮乃色やかつらみ　文考

影しらぬ

棹乃歌たえてうき草しげる岸　洲奥

雑花の紙池に蓮ある日より　素堂

うくひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

宵まきに二階にねころほとゝきす　桃隣

ほとゝきす一二の橋乃夜明かな　其角

行燈と月夜まかせんほとゝきす　嵐雪

挑灯乃雲に途なしほとゝきす　杉風

木かくれて茶摘も聞や郭公　芭蕉

まちまちや茶のかほりしやる子規　素堂

晴ゆる空風が雨になる子規　利牛

子規顔の出されぬ格子哉　野坡

麦

横きまに麦穂いやしや継どり　荊口

麦の穂とともにそよぐや筑波山　千川

麦蒔の田植やとまる蛍かな　許六

翁乃隠居を川きはまて送て

刈てみし麦乃白めや宿の内　利牛

おもしろし

麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡

おもしろかろ哉

浦風やむらがる蠅のはなれぎは　伏水

端午

五月雨や傘に付たる小人形　其角

さし鯖をくみやはつれし風の色　大坂 洒堂

五日とくをすまみるめあやめ哉　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みどりやき首乃骨なる田舎坐　仙花

帷子のまさぬめき鰹給られ　素龍

夏幟

並杖をみのて町のはつきかな　卧高

枝葉も音良あつしまれまあ　斜嵐

二三疋鯉も嗅ぐるあつさかな　長崎 魯町

ちけむ乃刀改めぬあつさかな　桂雛

するが地や花橘も茶の匂ひ　芭蕉

此句は島田よりの便り

五月雨

はきくれやしたり合歓丸の粽　素龍

五月雨の名もやさしく大和川　桃隣

さみだれは小鮒をさげる宗匠かな　野坡

五月雨や宿の家にける蓄かな　嵐蘭

この句は桃隣よりきこえ

五月雨や龍もすくむあるかな　成秀

涼

川中の根木によるゝ小涼哉　芭蕉

月影はうごくゝ夜半や露おちう　五月

涼しさは娘まかする竹の枝　外七

乃坂どもこのぞみける涼しさか　探其

涼風をすゝみくれて涼しむ簾　智月

すゞしさを忘れし柄杓の雫かな　几峯

すゞしさや涼州の上にげてく　嘉来

夕暮は雲の菜を舟のかゝり　册岐

三ヶ月の陰にしてすむ瓦かな　素芒

蚊しらす

橋や家机乃ありところ　杉風

夏ハ斗むしや蚊屋も涼しき蜻蛉之　正秀

世の中や角力負の行れ学　里东

マの乙女仕くゝとくるゝ菜飯かな　嵐竹

春雨後三句

山吹も巴も出る田植かな　許六

ひるかほや雨降さしぬ花の泉　智月

ちらちらや人のすゝあぬ生うるみ　小銀

啼くのせをさゝやきあかすの菜　乙州

雨も乃雨宿こいるかりぬかな　丈州

覚えみし雨乃ゝ夕やた蚕　仙花

一いまれ蝶もうろくわる気かな　楚舟

赤りかる蝉も蓮の葉の雨　残香

楮の皮なゝ糸茶子々かな　為有

団扇貸付所のあつさかな　怒風

けふもまた八瀬の栖や雲の峰　祐甫

一枚にすける手拭竹のかぜかな　仙花

竹乃子や見えし藪くさきのうらさき　嵐雪

さるつき人　僕と酒をたしなむる也けく我かまひて程せしひまもなれあるをとはそれをよくあやしきかたりのみかたと名のおほかるをも見出すあらぬもれかれて涼をかまへく

段を湯に名のつくあつさかな　利牛

あるへの別業にてまつれ遊ひ来てあそひしきのなさかのきをたまはれて

水無月とねてみる山や夕涼　野坡

穐之部

名月

秋のもりかたにしのおしもり月を拾ふ時作の名をとらす

名月や天つ神にも君か萩一よさ　澁孝

草の戸や擂鉢もまろし泰の盧　去来

家買てことしは見ゆる月かな　荷兮

名月や佐保の紅葉の鶴　西堂

松陰や生松揚手の月見　黒東

うちわ乃鵬乃ひくさま月の　利牛

高きもおつまさしきの月　其角

むさしの仲秋のこころをよめる

望峯ノ不盡筑波を

明月や不二みゆるとする町　素龍

七夕

笹の葉に枕付てや星の閨　甚角

星合を見置て語れ朝からす　孤屋

七夕やふりかハりたる天の川　沾圃

盂蘭盆

そうきやうのからみ新や玉まつり　洒堂

踊るべきほどには酔て盆の舟　李由

盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡

朝皃

閉関

朝皃や昼ハ錠おろす門の垣　芭蕉

朝皃や日傭出て行跡の垣　利合

てしまし(?)[illegible]柳[illegible]　沾春

秋虫

手よれさ[illegible]きりぎりす　大津　智月

晦日[illegible]とぎれやきりぎりす　文出
[illegible]こそ鳴く　卯(?)石

こほろぎや筆で追ふ(?)硯の上　孤屋

雁

友雁の帰[illegible]　車来
[illegible]

雁の[illegible]硯の[illegible]　土芳(?)
旅行の[illegible]

逆(?)[illegible]雁の声　土芳

草花

こぼれ畑の萩や薄や秋の花　桃隣

あまりしくちゞや村すゝき　野童

行暮乃萩や刈れぬ稲の端　猿雖

草乃中や良き桔梗の花あらは
　あまえ隠れ草　丈艸

芦乃穂に箸うつ山の宮の猪
　山中の草花をみて　去来

草むらや鼻の先なる茄子の花　嵐蘭

園菊

菊畑おくある霧の夕日かな　杉風

増菊や花の咲出ん九月の気　桃隣

秋植物

柿のあるをとうとくの家ところ　利牛

落葉や谷まであら〆て蟹の甲　許南

秋風や茄子乃殻のあらはれて　木白

菊作りて宗まいらせて梯の桃　孤屋

そゝろしの名を菊花とよろこひ
られし誹無南山まとひさし追ひや
未得あこつきの天のさきしり八ツ子り
あとて見るハ其のかきちとてのやる人まろ
みまくあそひくみ附さるあるへし　縁
ろしぬ名月ハ池ろむすれ射乃ちゝあれ　やさし
天賀貞画の跡さらし尽むへきあれ

裏とうろも石臺にのせられて竹椒
のそしのこまある八上に氏住金とそれ
すりもちのつれそこみずりのつくべきられて
字乃まつれ二階のつま握りのひろけを
さのうる勢とあやうくみる傍と旅色の
もう家きなくひろりいでされなく抑りみせ春うハ
うる藍つり綴のやまもう勢すうしつられ
てひんを楷のほとうるをみきなあとあり
倉なる葉の上きみと丸岩ねれ秋くハ
庭已豆殺の比紅葉の色をみすゐを
名家の頂上とせりうく八へとある人
此母りとその隣きりみちの都との

小亭まこうる一あろれてあんちうまうくと
ひろうみのりしを下らせしおうりと六
やしあらるきみもあられまうしいまうの
人くも此堂とさりつれそうよく庭をも
さのあへうれうしきせもみまとへうれと

小序を去るの人

石臺をあけ根こそや庭さりし　冊岐
亂しうれ
あ樓取おしぬや秋のさうのき　山気
手ら尾名れ花や案内等の跡　文草
礎ひとりよき添抱の白ひ糸　酒堂
秋のくれいよくくるく露の月ハ　荻子

茸狩や薮蕈も見ハ紫し虫　利合

久良の汁ハ秋しら顔をこぶ　支考

とも秋とも風もくりくりともあれなり　小枝

秋風や蓮やあれたる池の上　傍 侍之

庖丁の片袖くらし月の雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も落てしぐれ風　桃隣

手枯乃桜ともに紅葉人あるとく八　芭蕉

桜木や藍染まりぬるさむさかな　丈梁

旅の藁乃きれめくや小松原　斜嶺

川菱は萩の手ぬるき夜寒哉　羽実

凩は義理をしらぬ小家かな　沙香

初霜や猫の毛も立庵かな　楚舟

凩や髭をしたる猫の面　八桑

あらし山に詣て

木枯の根にまとふ枝柿枝に　桃隣

笹竹月よに霜の横縫のさむさかな　游刀

時雨

芋畑の後へうらしく初時雨　荊口

里人の沖の時雨みれりとこそ　夫り

芭蕉翁をとむらひまいらせて

もとよりもしぐれにしぐれて一葉の庵　斜嶺

去年よりもあはれさびしきかな秋の暮　許六

精ねのころ

小春日とよりの御挽やまぬ　野坡

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主のるや大根引　芭蕉

沙汰もとしれぬ野の大根引　野坡

菜畑のはたけよりも大根　洒堂

はむさきの下のやさしさまそ

人参の赤さもしるさむさ八　野坡

この比を生まし日もむさ八　孤屋

蕎麦切りてむきさむさ八　利牛

笑わしもすがりてさびしさの月　我眉

奥庭や芦をちらして秋の月　里東

太の三日まふ川のなかをつれれ

松風よりの城のそしまのうるさそ

今宵かしら

雪

たつるふとあると敷てきたり　野坡

初雪の足くのやすみの夜あけら　利牛

夜川あや堀の山朋兰の黄毛土　買山

雪の日よ庵の僧を　驂禽　佐く

雪乃とはやさみすやきりんこ垣　猿雖

冬の夜の旅の手みそく

杉のこれを白紙しに衣の露　支考
朱北鞍や待乗のかたの更の詩　小枝
さつきや生まる屋々の清水かな　許六
虎蔦の横町さうるる門人中　洒堂
海山乃あら碑えゐる南の風　乙州
江の舟や曲突(ツイ)に寄る汐けむり　支鶴

鄙ぶり

若し草絹にかけて込む梅の花　羽黒　呂丸
麦菊や糀のかゝる白の端　芭蕉
禅門乃草の袈裟乃千衣　許去
ふれや続乃盆ねころ木村かな　智月
白魚のまんまる白ひや杉の箸　之道

楷の火やあらつき方此あらき人　丈艸
庚申や二ころに火雉乃わる霰　野香
注らし経の縁近すんでて神楽　其角
海へ降霰や雲に波の音　全
蝶ふくさらし己か棚つる大工かな　芭蕉
媒耕も世らしもらく八代かな　万平
餅つきや元服させる草履取　野坡
山科の君の御忌に出で陳元の　嵐雪
侍や氷にさしもひちらかし　智月
[illegible]草
このとれもくつきし行し事　杉風

そらかきぬ寝覚も涼し年の暮　李由

あらしけく鶯一羽としの暮　智月

綱引さの(?)けふもしたよ年の暮　孤屋

うしの卿を尋ねしら久絹しかれ　猿雖

年乃くれ人ふるさとに法師ひ　野坡

芭蕉いつの歳くれ乃中

いつまても生てるつもりに

死ぬる心とおもしやるまいりの　素龍

行年に涼しくも紙ひきの　沾圃

誹諧秋之部

秋乃花尾上の杉に離れけり　其角

おくれくて一羽流れる鶴　孤屋

影あふて月編むる貝吹く　仝

内の隣るに庭の門　其角

祖父ら子乃火揃も苗を見え　仝

つもひ庭雲に丸きところに　孤屋

下京は宇治乃菜壽歌さかれて　仝

姥子乃菊の裏ハおかしむ　其角

見と猫に子をちらして落るハへ　孤屋

象嵐く霍乱の針　其角

田乃畔に苗把を捨て出　孤屋

庭青めくらむ湯鼻乃ん　其角

乃煙乃引出しさんそうし娑　孤屋
彰く起さらくしぬ乃内　甚角
絵縄に鮭乃さりれハひられく　孤屋
暦北やさ後箋ありて　千角
要くて乃横津桂乃花乃みち　孤屋
むかしの手ありまのよせて毛　千角
いさんぬ茶き今はつりひ尼　仝
よき乃編乃あさしき内　孤屋
夜草おもてさしれてせられかり　千角
あげくとらへて小傍のや、うれ　孤屋
手の音蜜稀乃様も若ちりて　千角
常ともちらの風呂をすへ　孤屋

君うねえ乙りれ渋貫乃あまあり　千角
稈と清ちの将房つる笈　孤屋
辛濟く雀のくちる秋乃られ　千角
小より冷れ月乃雲行き　孤屋
娥婦しく臥く来よ肩の残　千角
上塗ふしまほく望　孤屋
小栗漆む行言すせて気まり　千角
名のもるらく淳菊乃らね　孤屋
今は寺未満ふしく吟行る　孤屋旅ましり智寿ま渋のかりけり哭

甚角　孤屋　両吟
五十韻

天野氏興行

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣
どんどと水の落る秋風　野坡
入月に夜はほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐のひろがる　桃隣
銅壺よりなまぬる湯をくんでつかふ　野坡
つよつと降る雨のつよやむ　利牛
風の氣がうしなひそめまうれ　野坡
近くに居れど長谷をまいらぬ　桃隣
年よりて者と常住ねがひ居　利牛
いつよりも寒い十月のそら　野坡
臺所より出る鬢撫まじき〳〵　桃隣
分にあうたる娵の仕合　利牛
まんまうに神子は深ふかえん　桃隣
綿ねたうりするゝ夕月　野坡
酔ふしれ佛きらふ望の月　利牛
瞳からつ星にきらくとの花し　桃隣
人の指圖に樂はまゝならぬ　野坡
もてや路もちやなる兒り　利牛
より平北横子中綸ほとき込て　桃隣
物かひ乃さかつくとくれもつんまれ　野坡
男近くさへ乃く身雑そまろし　利牛
伴るくしきり遊をつくく　桃隣
比座の草をきしと秋の暮　野坡

杉の木末ゟ月ハうつくし　利牛
ほしりち志の中乃あたゝかくて　桃隣
きゝたきハ又新藁の待　野坡
よいやうに我もとよりと出てゐる　利牛
ちやうしんされておもかめの方　桃隣
帷子も二肩まくらぬ暑さにて　野坡
京は惣別家に念入　利牛
焼物に組合たる富田(トン)麩　桃隣（名）
隣を借んて今も移ける　野坡
鷲の巣ハ雲鋪とする出来事て　利牛
先沖まてハみゆる入舟　桃隣
内てより菓子のきやくハ木の根　利牛

ちりたる風のつかぬはしき　野坡

振売の雁あはれなりゑびす講　芭蕉
降てはやすみ時雨する軒　野坡
番匠が樫の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月をみるかな　利牛
好物の餅を絶さぬあきの風　野坡
割木の安き国の露霜　芭蕉
網の者近づき舟に声かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきハ殊軍の大事也　芭蕉

渋兎乃雲より　新酒もやめぬ　野坡
怕えつむ藁乃桃灯を吹けして　孤屋
瘧癖をもる湯屋の膏薬　利牛
上をきの干菜刻むもうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で恋する　芭蕉
絈買の七つさがりを音づれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此嶋の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖のうつる青草　野坡
新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帯しの水をあぶながり　野坡

平地の寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ悦　野坡
ころころと大晦も四つのかね　孤屋
学ろゐれてのむ肽乃後さき　利牛
中よくて傍輩合の借りかね　芭蕉
壁をたゝきて寝せぬ夕月　野坡
風やゝく秋乃鴎の尻さがり　利牛
鯉の胴子乃網をひろふる　孤屋
ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉

月見よりかのつれの稲ちまく　野坡
そこまでも客乃二日中肘ぐ　孤屋
鶯炭此ちりをとらへ集め風　利牛

芭蕉　野坡　孤屋
利牛　各九句

雪の松おれ口みれば尚寒し　杉風
日の出るまへの赤き冬空　孤屋
下肴を一舟浜に買ひ置きて　芭蕉
あいだとぎるる大名の供　子珊
身にあたる風もふはふは薄月夜　桃隣
粟をかられてひろき畠地　利牛
ウ熊谷の堤きれたる秋の水　岱水
箱こしらへて鰹節売る　野坡
二三畳寝所もらふ門の脇　子珊
馬乃荷物のさはる干網　沾圃
竹の皮雪踏に替へる夏の来て　石菊
稲ま子のさん雨乃そぼふる　杉風
あの奥に剃れ一人もみえぬ浦の秋　野坡
めつきりと風のさむる宵〳〵　利合
五月乃宮をかざりて旅大工　信之
背中へのぼる児をとらへゆる　桃隣
菜刻しきれき台て上手なりて　子珊
料りとくは小鮎のしする　石菊

名
約束もれて字体まさし銚子出る　杉風
給うへ上れて山のわりもち　岱水
御和りゝ色で紫井に歎かるり　孤屋
それ柴光てい油つき積置白　曽良
疏菜を摘く後へ下り込　桃隣
わきしわきく菜代の程　依々
雪白でおくバと自勝ときちらし　沾圃
ともかくはりて火をもて来る　子珊
又けさも俤の合く汁を増　利牛
捌てうりしるゝ買て来て　杉風
大坂は人をすゝむる冬の月　利合
酒をも呑まれく祖舟の辞入　野坡
すゝめる菊の箔のさけり　子珊
次は小形座てつとむせる声　利牛
紅葉よふしみくみたれバ坂つめ　曽良
七つのくりわふ祭名料呼て高気　杉風
赤の香おもふまゝ四手捧出しく　桃隣
男ましりふ蓬そむゆる　岱水

杉風五　野坡二　孤屋二
沾圃二　芭蕉一　石菊二
子珊五　利合二　桃鄰四
依々二　利牛三　曽良二
岱水三

撰者芭蕉門人

志太氏　野坡

小泉氏　孤屋

池田氏　利牛

猿蓑

晋其角序

俳諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起る
べき時なれや幻術の第一として其句に魂の入ざれば
ゆめにゆめみるに似たるへし久しく世にとゞまり長く人に
うつりて不変の変をしらしむ五徳はいふに及ばず心を
こらすべきたしなみなり彼西行上人の骨にて人を作り
たてゝ声はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されけ
り人には成侍れども五の声のわかれざるは反魂の
法のおろそかに侍にやさればたましひ入たらばアイ
ウエヲよくひゞきていかなる人か此をけちやぶらむ只
俳諧に魂の入たらむにこそとて我翁行脚のころ
伊賀越しける山中にて猿に小蓑を着せて俳諧の
神を入たまひければたちまち断腸のおもひを叫び
けむあたに懼るべき幻術なり是を元として此集をつく
りたて猿みのとは名付申されける是が序もその心を
とり魂を合せて去来凡兆のほしげなるにまかせて書

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あれきけと時雨来る夜の鐘の声　其角

時雨きや並びかねたる魦ぶね　千那

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧 丈艸

鑓持の猶ふりたつるしぐれ哉　膳 正秀

廣沢やひとり時雨るゝ沼太良　史邦

舟人にぬかれて乗し時雨かな　尚白

伊賀の境に入て

なつかしや奈良の隣の一時雨　曽良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆

馬かりて竹田の里や行しぐれ　大津 乙州

あまされし星の光や小夜時雨　羽紅

新田に稗殻煙るしぐれ哉　ゼゼ 昌房

いそがしや沖の時雨の真帆片帆　去来

たつまりや北斗の星の前　イガ 百歳

一いろも動く物なき霜夜かな　野水

淀にて

はつしもに何とおよるぞ船の中　其角

帰花それにもしかん菊の花　同

禅寺の松の落葉や神無月　凡兆

百舌鳥のゐる野中の杭よ十月　嵐蘭

こがらしや頬腫痛む人の顔　芭蕉

呼かへす鮒売見えぬあられ哉　凡兆

ならにて

掛し簾のこぼさるゝ枯野かな　イガ 土芳

渋柿をながめて通る十夜哉　ゼゼ 据道

ちやのはなやほるゝ人なき霊聖女　越人

このむしろ乃菜の花[illegible]つま折かな　イガ 猿雖

古寺の簀子も青し冬がまへ　凡兆

八島の吟[illegible]居をすゝく

雑炊のなところならば冬ごもり　乙州

この寒き牡丹の花のまつ裸　伊賀 車来

草津

晦日もろともうくるひのこゝろかな　尚白

神足水口ちからある浅瀬　珎碩

霜月朔旦

猿まわり外に抱かし赤柏　伊賀 良品

ふる年も月日水に程やたゞ似雲　羽州坂田 不玉

今ハ世をたのむけしきや冬の蜂　尾張 且藁

尾頭のこゝろもとなき海鼠哉　去来

一夜〳〵さむき姿や釣干菜　伊賀 探丸

みち[illegible]多賀城める井のさむさかな　尚白

茶湯とてつめたき日にも稽古かな　江戸 亀翁

炭竃に手負の猪の倒れけり　凡兆

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉

寝ごゝろや火燵蒲団のさめぬ内　其角

門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆

木兎やおもひ切たる昼の面(ツラ)　尾張 芥境

みゝづくは眠る処をさゝれけり　伊賀 半残

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり　丈艸

浦風や巴をくづすむら鵆　曽良

あら磯やはしり馴たる友鵆　去来

狼のあと蹈けすや濱千鳥　史邦

脊戸口の入江にのぼる千鳥かな　丈艸

いの川きこゑ(?)ふきあれて鳴千鳥　千那

矢田の野や浦のなぐれに鳴千鳥　凡兆

筏士の見かへる跡や鴛の声　木節

水底を見て来た貌の小鴨哉　乙州

鳥共も寝入てゐるか余吾の海　路通

死まで操くづさぬ鷹の爪　是東

襟巻に首引入て冬の月　杉風

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

かりもりの蒲団をかるや冬の旅　去侍　暮年

見やるさへ旅人さむし石部山　大津尼　智月

翁の御比あたまし衾をあたへらるゝ記あり略し

首出して初雪見ばや此衾　竹戸

題竹戸之衾

疊めは我が手のあとぞ紙衾　曾良

魚のかげ鵜のやるせなき氷かな　探丸

古川にこびを救珠もおもふ網代守　乙州

病(?)後(?)の体(?)を

膝つきにかしこまり居る霰かな　史邦

梧桐の葉に家に散て霰かな　野童

鶺鴒の橋よりこぼれて霰かな　伊賀　示蜂

呼かへす鮒売見えぬあられかな　凡兆

こゝろれ濡る青や絹繰出来るを　膳所　昌好

はつ雪や内に居さうな人ハ誰　其角

初雪に鷹部屋のぞく朝朗　史邦

霜やけの手を吹てやる雪まろげ　羽紅

わきも子か爪紅粉のこす雪まろげ　探丸

下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

なかなかと川一筋や雪の原　同

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し　芭蕉

草庵の留主をとひて

衰老ハ簾もあけす菴の雪　千那

雪の日ハ竹の子笠ぞまさりける　尾張　羽笠

ゆくくしも健なしハ雪はれし　長崎　卯七

ひのけしひや夜着のこしまてき　去来

書亜追悼

死のこまま世を渡しける師走哉　尚白

から鮭も空也の痩も寒の内　芭蕉

攝よと懐を新す似あはぬ物もなし　乙州

一月をことの茶を世をちらしけり　丈艸

住吉奉納

夜神楽や鼻息白し面の内　其角

花も雪も取の花を雪のなる物も　伊賀　頌珠

家しやうちにしきまて掃除　祐甫

乙州か新宅にて

人に家をかはせて我は年忘　芭蕉

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角

[illegible]の紋やり袖をゆすく小手枕　長和

うす壁の一重は何か年の宿　去来

くれて行年のまうけや伊勢くまの　同

大としや手のおかれたる人ごゝろ　羽紅

やりくれて又やさむしろ歳の暮　其角

いねいねと人にいはれつ年の暮　路通

年のくれ破れ袴の幾くだり　杉風

夏

有明の面おこすやほとゝぎす　其角

夏がすみ曇り行衛や時鳥　木節

郭公まねくか麦のむら尾花　芭蕉

時鳥けふにかぎりて誰もなし　尚白

ほとゝぎす何もなき野ゝ門ン構　凡兆

ひるよりはちさきかいゝぞを時鳥　智月

蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦

入あひのひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

ほとゝぎす瀧よりかみのわたりかな　丈草

心なき代官殿やほとゝぎす　去来

こひ死ば我塚でなけほとゝぎす　遊女　奥州

松嶋一見の時千鳥もかるや鶴の
毛衣とよめりければ

松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす　曽良

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

旅館庭せまく庭草を見ず

若楓茶いろになるも一さかり　膳所　曲水

四月八日詣慈母墓

灌仏や墓にむかへる獨言　其角

葉がくれぬ花を牡丹の姿かな　江戸　全峯

別僧

ちるときの心やすさよ米嚢花　越人

鈍き夫のある人に見えて此茶　猿雖

似合しきけしの一重や須磨の里　亡人　杜国

まくらもと白ひなげしの一つ哉　嵐蘭

井の水を汲に流るゝ杜若　史邦

起出て物にまぎれぬ朝の間の

悲しのむらさきうれがさき河さく　仙化

題去来之嵯峨落柿舎　二句

豆植る畑も木部屋も名所哉　凡兆

破垣やわざと鹿子のかよひ道　曾良

南都旅店

絲のなくなし此蚊乃宿の柏　千那

涼しさやきゝもまどうし世の杖の楊の枝　膳所　昌房

豊國にて

竹の子の力を誰にたとふべき　凡兆

竹の子や畠隣に悪太郎　去来

たけのこや稚き時の絵のすさみ　芭蕉

粽に吹くさしかりしこの氣　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉

君か代や筑摩祭も鍋一ツ　越人

五月五日ころ手にせる家々て
屋の上に蓬てふきける菖蒲ハ　其角

粽結ふかた手にはさむ額髪　芭蕉

隈篠乃廣葉うるハし餅粽　江戸 岩翁

さゝひしされ客人やよまうつゝ　尚白

五月六日大坂うち死の遠忌を弔ひて

大坂や見ぬよの夏の五十年　蟬吟

奥刕高舘にて

夏草や兵共か夢乃跡　芭蕉

這出よかひやか下の蟾の聲　同

此境はひわたるほどといへるもこゝの事にや

かたつふり角ふりわけよ須磨明石　同

ところゝの家ゝかり植てめくりて　凡兆

此孫麦の味をとふ卒やゝ月夜　木節

高士の謂此身有りさつき雨　史邦

奥の名取の郡に入て中将実方の塚ハ
いつくにやと尋侍れハ道より一里半
左の方笠島といふ所にありと
おしゆふりつゝきたる五月雨いとわりなくて

あくみするに

笠嶋やいつこさつきのぬかり道　　芭蕉

大和紀伊のさかひはてなし坂にて往来

の順礼をとゞめて奉加すゝめられて

料足つゝむ紙のはしに書つけ侍る

つゞくりもはてなし坂や五月雨　　去来

髪剃や一夜に金情て五月雨　　凡兆

日の道や葵傾くさ月あめ　　芭蕉

縫物や着もせでよごれ五月雨　　羽紅

七十余の老醫みまかりけるをかなしむ者

こそりてなくまことにいとみのるし

けるその老醫つすかしにしもさらぬ

又ちれる人はおもさりけれハ気分もたのむ

ましはして古来まれなる年ふしぬると

ことゝかくゆりさしけりな生え

六人も力おとしや五月あめ　　其角

百姓も麦に取つく茶摘哥　　去来

ちからしらや茶の山しまる五月れ　　正秀

つかみ合子どものたけや麦畠　　膳 游刀

孫を愛して

麦藁の家してやらん雨蛙　　智月

麦出来て鰹迄喰ふ山家かな　　江戸 花紅

しら川の関こえて

風流のはしめや奥の田植うた　　芭蕉

出羽乃最上を過て

眉掃を面影にして紅粉の花　仝

法隆寺開帳南無仏の太子を拝して

御袴のはづれなつかし紅粉の花　千那

田の畝の豆つたひ行螢かな　万乎

膳所曲水之樓にて

螢火や吹とばされて鳰の闇　去来

勢田乃螢見二句

闇の夜や子共泣出す螢ぶね　凡兆

ほたる見や船頭酔ておぼつかな　芭蕉

三熊野へ詣てける時

螢火やこゝ掛るしき八鬼尾谷　長崎　里尼

あふうちま鮮とせりほとゝぎすかな　尚白

草むらや百合をかくしたれの良　半残

病後

あふりやかしらつく百合花盛　大坂　何処

さまかはやふりのせく百合の花　乙刕

嫂殿辞を組りて

子やなくらん子の母も姪の冷こ　嵐蘭

餞別

立さるや蚊屋もつらぬ殿の宿　膳所　里東

ふしく我人まられて

象潟より泥老ることを思ひして

みさごの巣吉野ゝ冠をはなれず　其角

薄明や蚤の出くる耳の穴　丈艸

下闇や地虫ながらの蝉の声　嵐雪

膳所
宮つくりや居宅かゆる蝉の声　探志

無常迅速
頓て死ぬけしきは見えず蝉の声　芭蕉

あつさや盲麻刈るあすの雨　槐市

渡りかけて藻の花のぞく流かな　凡兆

舟引の妻は唱哥の合歓の花　千那

白雨や鐘きくまでは日は夕　史邦

素堂亭蓮池

白雨や蓮一枚の捨あたま　嵐蘭

日焼田や時々つらく鳴く蛙　乙州

日の暑さ盥の底の蠛かな　凡兆

水無月も鼻つきあはす数寄屋かな　同

日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀

ゑく暑し籬はなれぬ髪の蟲　木節

ちりんこの藪ぬくれしあつさかな　野童

夕がほによばれてつらき暑さかな　羽紅

青草は湯入ならむあつさかな　巴山

千子が身まかりけるをきゝて、みのゝ国より去来がもとへ申つかはし侍ける

なき人の小袖も今や土用干　芭蕉

水無月や朝めしくはず夕すゞみ　嵐蘭

じだらくに寝れば涼しき夕べかな　宗次

すゞしさや朝草門ンに荷ひ込　凡兆

屋ふ雲つく児のまくこれ　　千那

月鉾や児の額の薄粧　　尚白

夕ぐれや屼並ひたる雲のみね　　去来

もしをて涼みにゆく
雲れゝの今のを沈敷は似てあり　　大坂　之道

蛛

穐風や蓮をちからに花一ツ　　不知　濵人

此句東武よりきこえ申し素堂ゝ

がつくりとぬけ初る歯や秋の風　　杉風

芭蕉葉は何になれとや秋の風　　路通

人に似て猿も手を組秋のかせ　　珎碩

加賀の全昌寺に宿す

終宵秋風聞やうらの山　　曽良

芋の戸や蟋蟀の霞を嫌の風　　江戸　山川

あさ露や欝金畠の秋の風　　凡兆

くり舟や猿の膝芝の朝あらり　　去来

大比叡やしの字を書て一霞　　野童

こと葉ちりて涼みとりれ桐の苗　　凡兆

文月や六日も常の夜には似ず　　芭蕉

合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ　　仝

七夕やあまりいそがばころぶべし　　伊賀小年　杜若

こゑてみな頼まれたりお相撲取　　去来

朝々に露脈るるれはのよれ　　伊賀　風麦

萩やなくこの蔓やれはしくれ　　膳所　及肩

笑ふにも泣にもにざる木槿かな　嵐蘭

手をかけて折らで過る木槿哉　杉風

[illegible]　子郷

[illegible]　史邦

そよ〳〵や藪の内より初あらし　且藁

秋風やとても薄はうごくはず　三川 子尹

迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八朔おりしも[illegible]して紫[illegible]の文
[illegible]

[illegible]　凡兆

[illegible]

君が手もまじる成べしはな薄　去来

草刈よそれが思ひか萩の露　平田 李由

元禄二年翁に供せられて、みちのく
より越路にかゝり行脚しけるに
かゞの国にていたはり侍りて、いせまで先
立けるとて

いづくにかたふれ臥とも萩の原　曾良

桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆

初[illegible]　落梧

堅田にて

病鴈の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉　仝

加賀の小松と云所多田の神社の
宝物として実盛が菊から草の
かぶと同じく錦の切あり遠き事
ながらまのあたり憐におぼえて

むざんやな甲の下のきりぎりす　芭蕉

菜畠や二葉の中の虫の声　尚白

ちるとおりや額に小幕て鳴蔵八月よ　風麦

いせまうでして乃附

葉月や矢橋に渡る人とめん　故人　千子

二十日月よ蠶のあとゝゐまくらり　之道

粟稗と目出度なりぬ世の月よ　半残

月見せん伏見の城の捨郭　去来

翁を茅舎にまねきて

おりしりう松の葉えに落る秋　伊賀　土芳

加茂に詣

去くさ涙のかゝる所と
かの上人のたふとさの

やゝ寒み神楽の袖にふるしぐれや

月影や拍子をするし膝の上　史邦

友達の六人ばかりそゞろにまかりける

新米うしたゞ見え遣る鶏頭哉　伊賀　良品

そゞろさ菊や秋しくれ月の影　乙州

京筑紫去年の月とふ僧中ら　文卅

秋風のおくまでや二重の月ひとり　凡北

鳥のかへりて よしなきもの月の雨　尚白

向の能き宿も月見る契かな　曽良

元禄二年つるかの湊に月を見て
気比の明神に遊行上人の古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上　芭蕉

仲秋乃夜猶子を送葬して

かゝる夜の月も見にけり野辺送　去来

明月や處は寺の茶の木はら　膳所 昌房

月さへてきえ人の砧まつりけり　羽紅

僧正のいもうとの小屋のきぬたかな　尚白

初潮や鳴門の浪乃飛脚舟　凡兆

一戸や衣もやふるこまむかへ　去来

稗の穂の馬逃したる気色哉　越人

渋糟やからすも喰ハず荒畠　正秀

あやまりてぎゞうちゆる鶉かな　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉　凡兆

むつかしき拍子も見えず里神楽　良品

旅枕鹿のつき合軒の下　江戸 千里

鳩ふくや渋柿原の蕎麦畠　珍碩

上行と下くる雲や秋の天　凡兆

鶺鴒の[illegible]　半残

いなつまの闇のくらきを[illegible]　尚白

菊を切る跡まばらにもなかりけり　其角

[illegible]鶉の鳴月や[illegible]　珍碩

こゑひろふかりうかしい稲の秋　士芳

稲こくや母は出はぬ家うちかな　几兆

自題芦角舎

梅ぬしや情うちこぼしあらしし山　去来

走し流やゆうつく橋の下あまの葉　加賀小松 塵生

桃ちらし竹伐山のくすの葉　几兆

神田某

されバこそこれの柳子れの下へ

神田某の新宅の新よう音

柳のさく人おりまあつりや　数足

花すゝき大名の九を出かけり　嵐雪

月秋の屋根は頭もすゝきかな　丈艸

立出る秋の夕や風ひかし　几兆

世の中を鶺鴒の尾のひまもなし　仝

温泉の奥の歯子をとぞ蝶の葦　荷兮

春

梅咲くく人の姿の梅もあらず　露沾

上臈の山荘にまします折子假しまりて

梅の香や山路猟入る友もあら　去来

むめの香や谷入里も井の角　加賀 句空

庭真

梅の香やすみ利しき流れ谷の奥　士芳

まつ嬉し月なき夜の梅の花　半残

梅の香や酒のうちのあさしき　越前 蝉莪

むかしの春や廿一日卯時を發句のかをり　其角

子良館の後に梅有といへば
御子良子の一もとゆかし梅の花　芭蕉

痩藪や作りたをれの軒の梅　千那

所狹く白梅うゑむ垣根哉　元兆

日當りの梅咲ころや屋根の房　張西 支考

暗香浮動月黄昏
入相の梅になりこむひゞき哉　風麦

武陵桃ならぬ旅亭の残夢
痩しかもうき家は細見や園は梅　乙州

辛未の冬にしはすの廿日あまりと
いふ日うれて梅のちりかゝるゝをよめる　出六

同じ嵐雪の句より白梅の事も
其角か梅一輪一輪のあたゝかさの
やうにおもひ給ふはおもしろれて感銘
身にそみてみえ侍るとて此句をはなれて
その梅の事を正しくあるえて候る
此のほかに七人にて風雅を
尽さるや

夢さめて又一白し青き梅　嵐葉

百八の鐘て遠ひや春乃むめ　毛角

ひとり尼藁屋すげなし白つゝじ日　去来

野白梅や扉に遊のけしき摘若菜　史邦

くつ音や雪濟あとに若菜哉　嵐蘭

青き月あかるき川やそのさゝめゆく　如行

憶翁之客中

裾折て菜をつみしらん草枕　嵐雪

つみすてゝ蹈付かたき若菜哉　路通

七種や跡にうかるゝ朝からす　其角

我事と鯲のにけし根芹哉　丈艸

うすらひやわつかに咲る芹の花　乙州

鵆とハ雲のくらきに月夜かな　仝

鴨ハなほこぬまにうかれ鴛哉　去来

鶯の啼や蒲団すゝ煙たかれ　伊賀 一桐

鶯やとゝや一あまれもとりの木　江戸 湊名

うくひすや遠路なから礼かへし　其角

鶯や下駄の歯につく小田の土　凡兆

鶯や家に雀をすゑてかへる　伊賀 奥田

や梅の君柳くゝりハすゝきかな　探丸

此論をさゝれおくき柳かな　江戸 卜宅

垣こしにとらへてはなす柳かな　同 遠水

よこた川植木の間の柳かな　尚白

青柳のしだれや鯉の住所　伊賀 一啖

雪汁や蛤いかす場のすみ　同 木白

侍中乃西内もをそくさく月　楊水

田家に有て

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻　芭蕉

うらやまし思ひ切時猫の恋　越人

うき友にかまれて猫の空ながめ　去来

露沾公にて餞乞の當座

春風にぬぎもさだめぬ羽織哉　亀翁

なく春雨ちりし日をきさ二月か　尚白

出かはりや櫃にあまりてふれけり　亀翁

出替や幼ごゝろに物あはれ　嵐雪

青柳のかはしる鶏みえて黄哉　凡兆

白魚や黒き目を明く法の網　其角

人のつくりにこしまく様や桜海苔　尾張 杉峯

麦畠にたきし牛よろつくし　元春

陽炎や取つきかぬる雪の上　荷兮

かげろふや土もこなさぬあらおこし　百歳

かげろふに寐てやうごく蓑虫の砂　土芳

いとゆふのいとあそぶ也虚の中　伊賀 水同

野つるまゝ子花あるまん楓かな　凡兆

かげろふや柴胡の糸の薄曇　芭蕉

いとゆふに貞りの任他栬哉　伊賀 配力

狗脊の塵にえらるゝわらび哉　嵐雪

彼岸まへさむさも一夜二夜哉　路通

このむしや常住すて涅槃像　野水

蔵並ぶ裏は燕のかよひ道　凡兆

立さりく今や紀のしきの居　伊賀 猿雖

春雨や蓑の中の菫中ほき姿
ゑめよ乳しく　嵐虎

まつ黒に山より出る雨の門　猿雖
不埒なりやかき乾されたる石の面　芭蕉
寒き夜や田芸のしまれ鰯売　史邦
すがきえの枝の折るや新にあたる杖　羽紅
既亀や苗代水の畦くぐり　史邦
雖しの田ある本輔の作や出る妻　昌房
拆字ねや下を死をかたる主さ寝の雛　素芳
春風にこそみすれ銀の世を秋の花　イカ 萩子
桃桜くりかへりて人の子　羽紅
こゝろのまゝ浅き末よしあしきの外　三川 六槹
里人の縁を厚うしてる田畑の礼　嵐雉
隣の事く一条霞まろの菜の花　半残
帯紫頭に白根に嶽より木かぶ　加賀山中 桃妖
いろのたけれもちもせも隣　筆 園風
日めくる新やをそくみ上の新しなみ　珍碩
前歳鶴の声寿のすしいそ樽の気え　土芳
宿の女も草をさまよひて侍　芭蕉
哉より庭禅へ行て銀のまゝ
のおやしきそこらし道まなき
山陰にさま々しのて
鶯の巣の樽の秋桜五日八入ぬ　九兆
冬まとつり見えさる雲のうらら代　筆 石口
子や待つ雛か雲鮮のさるあるて　杉風
ひそりみく中れ梅子や雑子の姿　芭蕉

芭蕉菴のかうきを縮

菫草小鍋洗しあとやこれ　曲水

春風に箭節頭しても見ゆる神なかな　廬山店

画讃

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　芭蕉

白魚は家おりまへつく様かれ　車来

かけろふやまくひろふ原の薄

賢けつりんも拙むつしとけを

さりとくて

笄もくしも昔やちり椿　羽紅

猫年寄の色ぞらつきさ汁　津国塔本氏

みくひもを及笠坪しる様か　芭蕉

すへてらし進さふさけ入まら　利男

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山ざくら　其角

一株の花にも知るやもりし出をし　嵐白

鶏の声もきこゆる山ざくら　凡兆

世の中はつくし枝あんちる桜　丈草

ききの角のそろつくは嘆下まさり　史邦

山寺の杉まれて今は花の雪　千那

葛城のふもとを過る

猶みたし花に明行神の顔　芭蕉

いかの国花垣の庄はそのかみ南良

の八重桜の料に附られけると云伝へ

まん魚拝て　日
一里ちらゝ紅花さゝの子孫ゝや也
亡父の墓東武谷中にありしを三峯
まて写し九年の程々の經たりぬ
墓のまへ樒り植ゑ給ひしより此かゝし
毎此折ふしまうでゝ夕の樒を手向
樒々手向他の墓物まて咲よふれかれえ
まゐりしや花咲く路の經還り　園尾
知人まふあらゆしし花見に　素来
ある僧の哀れし莟の数ふれ　九兆
浪人の下よふかし
帰たまの顔ふれ尓花　敬　丰残

咲きたし紅ちまち中の御子へ小　長眉
もるは愛らしやしは海ゝ咲しぞて
大空ゆやよりしおし奥の笑乃果　芳良
道灌山にのぼる
石灘や飛ぶ鳥の代を嵐に　嵐叢
源氏の絵を見て
樒手に飯ちる莟れ立すらさ　羽紅
庚午の歳家を焼て
焼まぐりけむりと花ぞちりすほし　加賀 北枝
かしはらや伽藍の樞押しもとし　江戸 九兆
海棠乃たれゝ満る夜の月　普松
大和めり棒乃くるさ

草臥て宿かるころや藤の花　芭蕉

山吹や躑躅よけたり尾の移り　探丸

やまつゝじ海に見よとや夕日影　智月

紀角して竹荒つゝ夜は淋しさよ　山川

鶯の声きゝそめてより山路かな　伊賀　式之

木曽塚

其春の石ともならし木曽の馬　乙州

春の夜ハ誰か初瀬の堂籠　曽良

望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける　芭蕉

鳶の羽も刷ぬはつしぐれ　去来

一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉

股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆

たぬきをおどす篠張の弓　史邦

まいら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉

人にもくれず名物の梨　来

かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　邦

はきごゝろよきめりやすの足袋　兆

何事も無言の内はしづかなり　来

里見え初て午の貝ふく　蕉

ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆

芙蓉のはなのはらはらとちる　邦

吸物は先出来されしすいぜんじ　蕉

三里あまりの道かゝえける　来
この春も盧同が男居なりにて　邦
さし木つきたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
ひとり直りし今朝の腹だち　来
いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪げにさむき嶋の北風　邦
火ともしに暮れば登る峯の寺　来
ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
隣をかりて車引こむ　兆
うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉
いまや別の刀さし出す　来
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　来
湖水の秋の比良のはつ霜　蕉
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦
ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆
押合て寝ては又立つかりまくら　蕉
たゝらの雲のまだ赤き空　来
一構鞦つくる窓のはな　兆
枇杷の古葉に木芽もえたつ　邦

去来九　芭蕉九　凡兆九

市中ハ物のにほひや夏の月　凡兆
あつしあつしと門々の声　芭蕉
二番草取りも果さず穂に出て　去来
灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋ハ銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞとひやうしに長き脇指　来
草村に蛙こハがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりハ花のつぼむ時　来
能登の七尾の冬ハ住うき　兆
魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　来
立かゝり屏風を倒す女子ども　兆
湯殿ハ竹の簀子侘しき　蕉
茴香の実を吹落す夕嵐　来
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を経る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　来
五六本生木つけたる瀦(ミヅタマリ)　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてゝ早き御馬の刀持　来
でつちが荷ふ水こぼしたり　兆

戸障子もむしろがこひの売屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　来
こそこそと草鞋を作る月夜さし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのままにころび落たる升落　来
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　来
さまざまに品かはりたる恋をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故ぞ粥すするにも涙ぐみ　来
御留主となれば広き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ昼のねむたさ　来

凡兆十二　芭蕉十二　去来十二

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆
あぶらかすりて宵寝する秋　芭蕉
新畳敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十のさかづき　去来
千代経べき物を様々子日して　蕉
鶯の音にたびら雪降る　兆
乗出して肱に余る春の駒　来
摩耶が高根に雲のかかれる　水

ゆふしほちかき暮は風寒し　北
蛭の口やめをとらさて身体をさき　蕪
その相のひく客ちまで使ひ日和　水
追世て〳〵ききふ度ふけくのを　来
金借しらへかさかへ家のやきき　蕪
あり風呂すききれ宵して六月　北
町内の秋も豆ありやさき　来
何もなくる雨も霞へありくし　水
若しちる身ハ西念か夜まて　蕪
名
木戸の麻葉ちらまくされつゝ　北
ハのへるやらへ山路伊勢ハ四手から　水
紫さん家の趣とくしる　来

そうも家乃あれてぬさる小風　北
蝶の法売れ有明しなく　蕪
すきあしき女の多恵もて絵を　来
何かわけ草稚乃なく　水
夕日影器の管して床まる　蕪
人もわきれしあちこちの水　北
うそつきれ自慢いそ抜かる人　水
又も大そうの鄒をれ出す　来
跣より田のまやさしてさよ　北
かき義乃やしろハ続き社なり　蕪
揚貴妃尻あまるく名乗すそ　来
雨のゆくり此年ころ迎逑　丸

晝ねぶる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろしよろ水に藺のそよぐらん　兆
糸櫻腹いつぱいに咲にけり　来
春は三月曙のそら　水

凡兆九　芭蕉九　野水九
去来九

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
かさあたらしき春の曙　乙刕
雲雀なく小田に土持比なれや　珍碩
しとぎ祝うて下されにけり　素男
片隅に虫歯かゝえて暮の月　刕
二階の客はたゝれたるあき　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
稲の葉延の力なきかぜ　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
内蔵頭かと呼声はたれ　刕
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　示
すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝき札によみなして　刕
雀かたよる百舌鳥の一声　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　刕

鑓の柄に立すくみたる花の藪　去来
灰まきちらすからし菜の跡　兆
名　春の日に仕舞てかへる経机　正秀
店屋物くふ供の手がはり　来
汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸　半残
わかれせはしき鶏の下　土芳
大膽におもひくづれぬ恋をして　残
身はぬれ紙の取所なき　芳
小刀の蛤刃なる細工ばこ　残
棚に火ともす大年の夜　園風
こゝもとはおもふ便も須磨の浦　猿雖
むね打合せ着たるかたぎぬ　残

此夜もうれめをとくる破扇　風
寒酒搾らせてうりし見合る　雖
少　喰気の漬ハちらくさ縁つまひ　芳
添へハなりぬへくそれ人の薪　風
形なき路をみなむさる金澤黒　嵐蘭
うすき雲かける所の刹は結　史邦
花に又ことしはつれも定しれ　卧水
雛の袂を染るそしつ勢　羽紅

芭蕉三　乙州五　土芳三
珎碩三　園風三　素男三
猿雖二　智月一　嵐蘭一
凡兆二　史邦一　去来二

丗水　一　正秀　一　羽紅　一
半残　四

幻住菴記

芭蕉

石山の奥岩間のうしろに山有国分山と云そのかみ国分寺の名を伝ふなるへし麓に細き流を渡りて翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせたまふ神体は弥陀の尊像とかや唯一の家には甚忌なる事を両部光を和け利益の塵を同しうしたまふも又貴し日比は人の詣さりけれはいとゝ神さひ物しつかなる傍に住捨し草の戸有よもき根笹軒をかこみ屋ねもり壁落て狐狸ふしとを得たり幻住菴と云あるし僧何かし八勇士菅沼氏曲水子之伯父になん侍りしを今八八年計むかしに成て正に幻住老人の名をのみ残せり予又市中をさる事十年計にして五十年やゝちかき身八蓑虫のみのを失ひ蝸牛家を離れて奥羽象潟の暑き日に面をこかし高すなこあゆみくるしき北海の荒磯にきひすを破りて今歳湖水の波に漂ふ鳰の浮巣の流とゝまるへき蘆の一本の陰たのもしく軒端ふきあらため垣根結添なとして卯月の初いとかりそめに入し山のやかて出しとさへおもひそみぬさすかに春の名残も遠からすつゝし咲残り山藤松に懸て時鳥しはしは

るゝを経宿りしある折彼岸しことを尽てきのつく
よものしそしくたまとそろを奥して魂足り稚之葉萌
たまる身ハ潮渡旧居を立つ山をも通中にこそ
さら人道よきかしこ海を南苗嶺より松い
此風海を負して添し日役乃山比良の多和ら
家楼の景をまことめく摂の禅の紹さらし出る
筆ゆりまかりに本拠の系多禁緑の小田に早苗と分
専学飛の山夕照乃こそふ争寄乃松音の更条
揃ふして多ると古寺明し常に宝山を生峯
乃侍に抑りよひと武蔵野をく古跡　栖も抑るいてられ田
よ出るは古人とうゝとさくに冬嶺く出より峰谷腰と
ワ山もと尾隆の黒森のこそろう高りて纜盛れ

よそしくまみえんため峯に集まる浦の漫々たるを見わたし眺ひます
あるは無しく浅の峯に遠の絶りの松乃棚作りの臺
乃間寺をも拙く楼の便掛よく見月假海堂あり
鳥居をいとまひさるさ峯の庵を結へる良翁徐佺
か徒よハあかし晴暖壁山と民と成く層亂まきを
とあけ出し空山し風を折て舟はさまし心また
あり附ら今朝清風を澄く月し散くしくの京を
僅く一妙の條りくらしたる昔僧化人乃孫に
なきよく侘あし俳りて多く高き抽すきあし
拾佛一間を残く夜の鶴ふときへきことまるへき
志ってつりこ濃を流ほしるされ山の傍正をかきの
甲斐任りし多穀をもて時これ海中の條りいまそちりる

とある人として額をといへはいとやすくと筆を染て
幻住庵の三字を送られけれは草庵の記念となしぬ
すへて山居といひ旅寝といひさる器たくはふへくも
なし木曽の檜笠越の菅蓑ばかり枕の上の柱に
懸たり昼は稀々とふらふ人々に心を動しあるは
宮守の翁里の男とも入来りていのしゝの稲くひ
あらし兎の豆畑にかよふなと我きゝしらぬ農談
日既に山の端にかゝれは夜座静に月を待ては
影を伴ひ燈をとりては罔両に是非をこらすかく
いへはとてひたふるに閑寂を好み山野に跡をかく
さむとにはあらすやゝ病身人に倦て世をいとひし
人に似たり倩年月の移こし拙き身の科を

おもふにある時は仕官懸命の地をうらやみやゝ
一たひは仏籬祖室の扉に入らむとせしもたとりなき
風雲に身をせめ花鳥に情を労して暫く
生涯のはかり事とさへなれは終に無能無才に
して此一筋につなかる楽天は五臓の神をやふり
老杜は痩たり賢愚文質のひとしからさるも
いつれか幻の栖ならすやと思ひ捨て臥ぬ
先たのむ椎の木もあり夏木立

題芭蕉翁國分山幻住菴記之後
何世無隱士以心隱爲賢也何處無山
川風景因人美也間讀芭蕉翁幻住菴

記乃識其賢且知山川得其人而益美
矣可謂人与山川共相得焉廼作鄙章
一篇歌之曰
琵琶湖南兮四分嶺　古松欝兮緑陰清
茅屋何様幾数間　内有仕人獨養生
満口錦繍輝山川　風景依稀入眺望
此地自古富勝覧　今日因君尚益栄
元禄庚午仲秋日　震軒具州

几右日記

間ゝ春中見えて中ゝ椿葉のれ　曲水
くれさそ乃煙ゝ多ゝかりの山　丹水

鶉もそうし月ゝふ鶉なく　去来
湖の水まさりけり五月雨一くさを　凡兆
軒ちかき岩梨折れ猿の手　千那
細脛のやすめ処や夜の窓　珍碩

[illegible]

おりふしや紙帳さかけと送りなり　史邦
いりこみて藪の茶の木の下もおりて　里東
鶯の啼てはよもてけり乃露　乙州
夜や藤の中の花ちりそき　採 怒誰
鳥もさし岩葉に結ぶ留　探志
五月雨の蓑をまるきかんて鳴　元志
木の葉に下りしてゆ鳴る鶉代　採 泥土

笠あつめ捨すしや風の冬　史邦

有落や涼む尻見ゆ夕すゞし　正秀

ちりかさ八重むら雲ちらす涼み外　六人　柳陰

帰りさやとりに葉萍む根へつ本　如行

詠よい泉あり

根のまゝをとりくて植や蝉の声　膳所　村水

目の下や手洗の縁を涼し　三ツ井　市隠

文まゐらん

稚子苗や早苗取にまかす夕濁　半残

麦の穂を手に持ちながら

一鍬つるれや[?]田のうへの麦　之道

車音

一夏のゝ山さかりや旅のまゝさき　其角子　亀翁

夕立や檜木の奥の一くもり　及肩

昇猿猴掛

秋風や田上山のくぼみより　尚白

猿猴菓

声ゝ寄りもまゝあしこの〆未外　卜枝

木履ぬぐ侍に生たる蓼の花　木節

色紙に書

縫まふん葉束銭や萩の露　膳所　扇

稲の花これを仏の土産哉　智月

石山や行かで果せし秋の風　羽紅

桶の輪やきれて鳴やむきり〳〵す　昌房

里さひし風夕めし附乃ゆふさ小　何処

晴やいく塔ふけこりのふる也　越人

越人と同しく留別

蓮の実の供に飛入菴かな　等哉

明年弥生尋白菴

春雨やあらしも果ず戸のひかり　嵐蘭

同夏

涼しさや此菴をさへ住捨し　曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也非比彼山寺偸衣朝市頂冠貌臣任心感物写興而已矣

洛下逸人凡兆去来蘊蓄学棋綴竹窓羅帶凌節斯有宗匠撰此集玩奇無色自謂絶超孤駿白衆者也旅足四方益友憧々往来或千里寄書々中皆有佳句日蘊月隆各程文章我有下昆仲騒士不之集縁者索居寓栖為難通信且有臣髭俔婦人不琢磨者皆廉言細諾為嘉目志雖毎至其域何棄其人乎哉東方四帝作六巻故不遑広捜他家文林也雖貽元禄四稔辛未仲夏余掛錫於洛陽旅亭偶会凡兆去来吟席見需把此叟鄙野尾卒擬其毫不揣拙康幾一襄高張有補于詞海漁人云

風狂野衲

丈草漫書

正竹書之